

『東亜新字』と『廣藝舟雙楫』

— 近代日中における漢字認識の異相 —

平野和彦

“Tōa-shinji” and “Guangyizhoushuangji”

— A study on the different aspect of KANJI (Chinese character) at the modern age in JAPAN and CHINA. —

HIRANO Kazuhiko

Abstract

“East Asian new character” is a claim of Japan, Korea, China’s KANJI unification by MAEDA Yen. It is to break away from the influence of Chinese culture since the Tang Dynasty, and the attempt to unify the country’s three KANJI characters of Liuchao. Kang Youwei’s “Guangyizhoushuangji” was translated into Japanese by NAKAMURA Fusetu and MAEDA to annotated it. Its name was “The theory of the Liuchao Calligraphy”. Maeda notes sandwiched between the case of Western-impact and Sinology revival, which give evidence of the identity of the Japanese at that time, and shows the different phases of Chinese and Japanese KANJI recognition.

キーワード：前田圓、中村不折、康有為、東亜新字、廣藝舟雙楫、六朝
Key Word : MAEDA Yen, NAKAMURA Fusetu, Kang Youwei, Tōa-shinji, Guangyizhoushuangji, Liuchao

前言

本稿は、二〇〇九年五月に開催された、華梵大学美術学系主催の「書法與當代社會國際學術研討會」において発表した拙稿「中村不折與前田默鳳——日本書道走向近代之社會背景反思——」(注一)で論じた内容の一部について、論旨の展開に鑑み、敢えて言及を避けた部分の再考を試みるものであ

る。冠した論題は、特に、明治中期における「漢字改革」という日本の思潮の一端を浮き彫りにするために想定し、且つ、その主唱のための実際的方法論が、中国近代の思潮との間でどのような連関性や相違を有していたのかを考えるために設定したものである。

こうした視点の可能性を敢えて否定しないのは、康有為の原著『廣藝舟雙楫』(一八八九)の、おそらくは上海廣藝書局初版本(一九一六)または上海廣智書局初版本(一九一六)、或は上海廣智書局第十八版(一九一六・

『書鏡』以前の版を底本にして、初めて邦訳して日本に紹介した『六朝書道論』（中村不折・井土靈山共訳・大正三年・一九一四・二松堂）に多く眉批を寄せた人物こそが、『東亜新字』を著した前田圓だったからである。また、翻訳者の中村不折が、特に前田圓に依頼して意見を拝したこと注目するからでもある。

尚、本稿は主に前田圓自身の漢字認識に焦点を当てて論述したことと、前田圓の膨大な漢籍出版事業については、既に、ロバート・キャンベル氏の『東京鳳文館の歳月上・下』（注二）など詳細な先行研究があり、また、字書編纂に関連する業績についても別稿に譲ることとして、『東亜新字』と『廣藝舟雙楫』に焦点をあてて比較検証した。

一 「漢字」をプロデュースする—前田圓の転身と浮沈—

(一) 「漢学」復興を期して出版事業の世界へ

前田圓（嘉永六年・一八五三—大正七年・一九一八）は、書肆「鳳文館」の主人として膨大な出版業績を残し、近代日本の出版界に大きく貢献した人物であることは疑う余地のない事実である。龍野（今の兵庫県龍野）藩士前田忠作の次子として生を受け、名は圓、字は土方。黙鳳と号し、別に龍野人とも称した。所謂「武士階級」の後裔である。嘉永六年（一八五三年）は、所謂「黒船」が浦賀沖に来航して、江戸幕府に開国を迫るアメリカ大統領国書をもたらした年であり、前田圓は、まさに幕末の動乱と同時に産声を上げたわけである。

播磨龍野藩は、幕末には老中を輩出した。その老中とは第九代藩主脇坂安宅（文化六年・一八〇九—明治七年・一八七四）で、龍野藩脇坂家の第

十一代目当主である。当時の脇坂家は、先代の父脇坂安董（明和四年・一七六七—天保十二年・一八四一）が、第十一代將軍徳川家斉によってその才能を見出され寺社奉行として重用されていた。安董は、所謂「谷中延命院一件」（大奥関連スキヤンダル）、「三業惑乱」（西本願寺教義論争）に関わる裁判で寺社奉行としての功績を挙げ、極めて稀ではあったが、外様から正式な譜代大名となった。安宅もまた、「襲封後」、「寺社奉行」、「京都所司代」、「老中」へと出世し、老中時代には「外国掛」（注三）を担当した。注目すべき事跡としては、天保十三年（一八四二）龍野藩の江戸藩校を廃止して、龍野の「文武稽古所」を藩校「敬楽館」とする教育改革を行ったことである。

鈴木正幸等著『兵庫県の教育史』（思文閣出版・一九九四）によると、

龍野藩では、天保二年（一八三二）に藩校が設けられるが、それ以前の家臣教育は、他藩同様、藩儒の手に委ねられていた。十八世紀の後半には、俣野玉川と藤江熊陽らが藩儒として家臣の教育にあたり、いた。毎月三、八の日、月に六回の講釈が城中で行なわれ、そこでの講釈の内容は四書を中心としたものであった。この他、藩儒の家で家臣の求めに応じ、私的な形での講釈の会があった。俣野玉川の場合には、城中講釈の日である三、八日の夜、藩の中心を占めるものたちが、『貞観政要』や『近思録』などをテキストに学ぶ会があり、また、月に三回あるいは六回、『論語』や『孝経』などをテキストとして講釈の会がいくつか持たれている（『龍野市史』第二巻）

とあり、藩校の設立前には、所謂「漢学」講義を旨とした家臣教育を主流とし、それが「敬楽館」の基礎となっていたことがわかる。

この藩儒俣野玉川（享保十五年・一七三〇—文化三年・一八〇六・注四）

には、死の直前のまで五十年近く（宝暦十年・一七六〇—文化三年・一八〇六）にわたって書き綴った膨大な日記史料が残されており、『史學雜誌』一〇五（一九九六）に、海原亮氏の「新刊紹介」（注五）もなされているように、当時の教育史、藩史または生活史を見るうえで非常に貴重な資料性を有している。本稿では、『播州龍野藩儒家日記（幽蘭堂年譜）』（竹下喜久男編・清文堂史料叢書第七二・七三刊・一九九五・注六）を参照したが、その中から、藩儒としての龍野藩家臣教育に関わる記述を、文化元年、「敬楽館」設立直前の日記からいくつか抄録しておきたい。

文化元年 正月五日 雨雪交降

読初儀式如先例、嘉善詩経敬之一章を開講、開読人七十四五人も有之と云々、相済候後も今日遠慮中ニ而不及発駕、…など夜陰迄残而被話、…

十月廿四日 晴

今日大阪懷徳堂江志罷越、大珉も赤石迄送之候而罷越ス

十月晦日 晴

長崎表へおろしや船一艘着岸、右之辺諸侯家手当有之、同所甚賑敷之由沙汰有之事長キ故略之

文化二年 正月廿二日 晴

則詩経御読嘉善講釈孟子終而御酒献、御吸物御般等献之、昼前御帰也、

四月二日

夫々千治案内ニ而中井履軒方へ尋久々ニ而対話、酒飯を被勸、夫々三人同道ニ而高津へ行、又活玉・天満天神宮へ参詣、…

など、『論語』、『近思録』のほかに、『詩経』、『孟子』なども会読しており、また、懷徳堂中井履軒との交友は頻繁であったようだ。特に、この頃にな

ると、交友、冠婚葬祭、火災や事件、家族のこと、書籍の虫干しに至るまで、実にさまざまな情報が日記に記されており、当時の情報が得られる貴重な資料である。

また、藩校「敬楽館」については、先代の脇坂安董が、既に、文化二年（一八〇五）、江戸藩邸内に藩校「敬楽館」を開き、天保二年（一八三一）には、国許の龍野に「文武稽古所」を開くことが決まって、天保五年に校舎が完成した。こうして、龍野藩は、文武両道の人材の育成に努めていたわけだが、安宅の時代になって、それらを国許に統合したわけである。前田圓は、まさにその国許に統合された「敬楽館」において青年時代の学問を積んだものと思われる。

前掲『兵庫県の教育史』によれば、天保十三年の江戸藩校廃止と国許での統合は、財政難によるところが大きかったようであるが、その財政難の一因ともなったのは、藩校離れ、即ち、「読書」離れと、殺生、内職に精を出して文武修行を怠り、不釣合いな衣食住や遊芸に耽る家中の風紀の乱れで、「文武稽古所」は、それを正すことも目的にしていたようである。

股野玉川は、文化二年の「敬楽館」設立前後には次のように日記を記している。

七月十日 晴

四時過貞蔵御役所江被出候処、追而ハ文武稽古所御拵被成候、尤一所ニ而可致稽古、其段兼而心得可罷在候など御沙汰有之候由、今晚河原へ納涼ニ罷越、尤一壺酒提行、右ニ付家内同道塾生三人其外和木田家弟子も行、健蔵・長平・定蔵も行、月色不明後快晴、夜半頃還家

八月六日 晴

朝後宝幢寺江参拝、江戸芝邸学館創立而敬楽館と被称、惣奉行出淵衛

士江被命、目付も新二被命、今月吉日を撰御開館有之候積ト便次告来前田圓その人と股野玉川の生涯には、当然ながら半世紀近い時代差があり、直接その指導下にあったわけではないものの、「敬楽館」の教育的基礎や、こうした先人、藩儒たちが形成した文化的背景があったことは確かである。

さて、前田圓は、明治六年（一八七三）、二十歳の年に上京。地方の多くの若者がそうであったように、新しい時代を求めて青雲の志を抱いて上京する姿は容易に想像がつこう。明治九年（一八七六）には、書肆「博文館」に手代として勤めながら出版業の修行を行うことになる。明治十五年（一八八二）に独立し、京橋の南鍋町に書肆「鳳文館」を開いて自ら出版業を開始したが、その事業は成功を治めて巨万の富を得ることとなり、こうして、当時一流の名士とも交流を深めてその名は一世を風靡することになったわけである。

明治十八年（一八八五）には、金石学研究のため上海、天津、北京などの地を訪れ、事業と学問を成就させようとした前田圓であったが、日本の学術的趨勢は愈々欧米に向かい、漢学の衰退に歯止めをかける術が薄れていたことは言うまでもない。しかし、前田圓はそうした時代思潮を意に介することなく、資金を投じて陸続と漢学書籍の出版を続けた。『佩文韻府』、『資治通鑑』、『康熙字典』、『史記評林』など龐大な漢籍叢書の出版は、当然ながらその資金繰りを圧迫していくことになり、明治二十一年（一八八八）、書肆「鳳文館」は経営不振からとうとう破産廃業を余儀なくされたのであった。

（二）漢籍出版事業に対する評価―「書」のプロデュースへ

「鳳文館」は、明治前期の一〇年代、既に、岡野他家夫（一九〇一―一九八九）『日本出版文化史』（昭和三十四年・一九五九・春歩社）によって

分類された日本近代出版史の四つの発展段階、即ち、第一階段「明治時代前期―著者中心の啓蒙時代」、第二階段「明治時代中期―出版企業確立、大書肆勃興時代」、第三階段「明治後期から大正前期―出版企業確立時代」、第四階段「大正末期から昭和初年―予約物全盛から圓本、文庫本の時代」、第五階段「昭和時代中期―戦中出版」、第六階段「昭和時代後期―終戦後の出版動向」の中の第四階段に先駆けて、その出版形態の尖兵を切っていた。企業家としての前田圓の先見性を見て取ることができる。

その後、漢詩文の学問は益々衰微していく。前田圓は、明治二十四年（一八九一）、「書學會」を設立して、雑誌『書鑑』を刊行し、巖谷一六、中林梧竹、日下部鳴鶴等とともに「書」の世界で「漢字」をプロデュースし自らも書家として活躍していくことになるのである。

この間の出版物としては、明治二十六年出版『楷法溯源』、明治二十七年出版『仮名彙纂』、明治二十九年出版『隸篇』と『真行草大字典』（書學會出版）等がある。時代の潮流に抵抗するかのようには、明治三十六年の『書学捷径』（博文館）、「実用三体字書」（中川文林堂）、明治三十七年の『五体字書』（博文館）と『草露貫珠』（中村義竹等編・印文學會）および『印文學』（鳳文館）、明治四十二年の『書訣』（書道振興會）と『心經』（光華堂）、明治四十三年の『書畫研究法』（光華堂）、明治四十四年の『四体いろは帖』（日本堂）、大正二年の『真行草字鑑』（二松堂）、大正四年の『黙鳳墨戲』（東亜芸術社）等等と枚挙に暇がないほどで、その文筆活動も、主に字典編纂を中心として脈々と旺盛な活動は留まるところを見せなかった。

前田圓の文筆活動と出版を助けたのは、「博文館」、「中川文林堂」、「光華堂」、「二松堂」、「東亜芸術社」等、「漢学」、や「書道」、「芸術」方面の出版に力を入れた出版が多く、そのうち、「博文館」と「二松堂」は、共に当時設立された「東京書籍商組合」の組合員である。『東京書籍商傳記集覽』

(日本書誌學體系二・青裳堂書店・昭和五十三年)の記載によれば、「博文館」(明治二十年創業)書店の主人大橋新太郎(文久三年—不詳)は、当時中国と密接な関係を持っており、また、前田圓が上京して初めて出版業の修行を行なった古巣でもあった。大橋新太郎は、中村不折がパリへ留学する際にも、大きな経済的援助を与えており、そのことは、中村不折の自伝「僕の歩いた道」(『中央美術』注七)にも詳細に記されている。

二 『廣藝舟雙楫』邦訳の背景と前田圓

『廣藝舟雙楫』の三つの書名の問題と出版前後の経緯や評価については既に論じた(注八)が、ここでは、康有為の原著に対して邦訳版に命名するにあたって、訳者の意図と認識がどのようなものであったかを更に詳細に確認しておきたい。中村不折が『六朝書道論』として邦訳出版した経緯と、そこに眉批を附して邦訳作業の一端を担うことになった前田圓の存在意義を明らかにするためである。尚、論旨の展開上、前傾論文に用いたものと同資料を一部提示する。

以下は、『民国时期总书目』(文化科学・芸術・注九)の記載である。

《廣藝舟雙楫》(清) 康有為著

- I 上海 廣藝書局・一九一六年初版・一四四頁・二十三開
- II 上海 商務印書館・一九三七年三月初版・一九三九年十二月長沙簡編版・一〇七頁・三十六開(寓有文庫・第二集・三九六種。王雲五主編・國學基本叢書)
- III 上海 廣智書局 一四四頁 二十三開。共六卷。書前有作者的敘目、寫于一八九〇年。一九一六年初版本著者題。(清)康祖詒

《書鏡》(原名、廣藝舟雙楫)・(清)康有為著

- I 上海 廣智書局。一九一六年十八版・一四八頁・二十五開
- II 上海 長興書局。一九一八年二月十九版・一五二頁・二十五開。共六卷。長興書局版前有康有為題詩及附日本人中村不折譯刻序、附日本人田園序、附井土靈山詩等。此書最早版約一八九四年。

即ち、『廣藝舟雙楫』は、清光緒十五年(一八八九・明治二十二年)に初版本が出版されて以来、版を重ねて、一九一六年に上海廣智書局の第十八版が出るに及んで、その版序に『書鏡』(原名『廣藝舟雙楫』)として名称、装いともに新たにす。康有為自身が自署改名したのである。同年、上海廣藝書局は『廣藝舟雙楫』の初版を発行し、更に同年、廣智書局は康有為自ら書名を題した『廣藝舟雙楫』初版本をも出版する。廣智書局は同一書籍を二種類の名称で出版したことになり、一九一八年には、上海長興書局が第十九版として『書鏡』を出版するなど、この二年間に二種類の書名が通行したのである。『六朝書道論』について言えば、康有為自らが第十九版序文で日本語版の存在を知らしめたのである。杜信孚等編著『同書異名通檢』(江蘇人民出版社・一九八二)に、

清康有為著 『廣藝舟雙楫』又名『書鏡』

と記載される事実がここにある。

羅榮邦氏の『南海康有為著作總目』に、

- 《廣藝舟雙楫》又名《書鏡》、初版、光緒十五年、六篇；光緒十九年版、六卷二冊。上海廣智書局。一九一六年。上海長興書局、一九一八年、十九版。日本譯本、《六朝書道論》、中村不折、井土靈山譯、東京二松堂、大正五年五版、昭和二年十一版。

とまとめられたものがこれで、湯志均氏が、羅氏の『南海康有為著作總目』

に跋して、

《南海康有為著作總目》根據《萬目草堂叢書目錄》、《南海叢書目錄》
以及家藏康有為遺稿、參閱美國、日本等名圖書館目錄綜合編成、搜集
的範圍很是廣泛。

と述べるように、三種類の書名は、既に、これら基礎資料を基にその存在
が暗示されていたわけである。

中村不折は、『六朝書道論』の「例言」において、前田圓とこの邦訳の関
係について次のように述べている。尚、例言は全六言。そのうち、特に第
二言と第四言を挙げて、訳者の意図と前田圓への信頼を確認する。

一 譯文成るに及び改め題して『六朝書道論』と曰ふは、人をして一見
以て書中の神髓は那邊に存するかを知らしめんが爲め也、書中論ず
る所、主として唐より以前に在り、唐宋以下に言及せるは議論の餘
波に過ぎず、而して論緒千波萬波の匯集する所、六朝に在るを知ら
ば、譯文に於て改題するも、原著者の意に戻るの虞なかるべきか。

一 鼈頭の評釋は不折と明記せる外は靈山の加筆に係る、印刷初校半ば
にして、前田黙鳳翁の北海道より歸京するあり、序を需むる爲め校
本を示したるに、悉く之れを通覽し、幾多の評語を加へられたるは、
譯者の感謝する所也。

この例言は、初版、第二版、第三版ともに異同はないので、「大正甲寅春初」
とした訳者の識語が示すように、大正三年（一九一四）に書かれて以降、
同書に大きな編集方針の転換がなかったことを意味しよう。ちなみに、初
版の奥付には、

大正三年一月三十日印刷 大正三年二月四日發行

六朝書道論 特價金一圓三十五錢

著譯者 中村不折 著譯者 井土靈山
發行者 宮下軍平 印刷者 油出榮三 印刷所 東洋印刷株式会社
發行所 二松堂書店

とあり、羅榮邦氏の『南海康有為著作總目』の記述に見える「大正五年五
版」とあわせると、二年間で五回もの版を重ねた人気セラーだったことが
わかる。

「例言」からは、「唐宋以下に言及せるは議論の餘波に過ぎ」ないと認識
していた「六朝」傾倒ぶりがよく窺われ、「印刷初校半ばにして、前田黙鳳
翁の北海道より歸京するあり、校本を示したるに、悉く之れを通覽し、幾
多の評語を加へられたるは、譯者の感謝する所也。」との記述から、前田圓
が中村不折等にとつても金石文字学の泰斗であり、敬意を表される存在で
あったこともわかる。

ここで、『六朝書道論』第三版の序文を見ておきたい。

本書は吾等の書に對する趣味を世の同好者に分たんが爲め上梓した
るものにて、初より多數の讀者あるを豫期せざりしに、第一版は二旬
を出でずして盡き、第二版も一月を経ずして盡く、爾後暫らく品切れ
なりしが、其の間幾多新材料の不折の手に入るものあり、殊にスタイ
ン博士採集の漢晋木簡の如き、舊來の書道論に一變遷を來たすべきも
のあり、夫等の事實と尚書品其の他執筆法等に關する意見數十項を鼈
頭に増補し、本文中にも數項の改訂を加え、卷頭の古法書中には六朝
人の肉蹟二葉を追加したり、是に於て本書も愈完好の域に進みたるを
自信す、因て一版二版を一讀せられたる諸君も亦三版を參看せられん
ことを望む。 大正三年六月上浣 不折 識

この序文から、初版は出版後わずか二十日足らずで完売し、第二版も一ヶ

月で売り切れ。第三版までの間に本文も含めて増補出版が行われたこと、鼈頭（眉批）が数十項加わったことなどが知れる。残念ながら印刷総数を知らずにはできない。しかし、発行部数の多寡に関わらず、既に初版本当初から二松堂出版物には広告頁が設けられており、第三版には『六朝書道論』も新たな一冊として加わっている。人気の一冊であったことがその広告コピーからも窺え（標点は筆者）、

六朝は書學の蒼萃也、淵源也。唐宋の大家皆此に出づ。元明清の名家は其末孫也。本書は、六朝書道論と題するも、實は始めて世に出たる純乎たる書學也。本書を讀まざれば書を學ぶ能はず、書を語る能はず。故に、書に志ある者は勿論、苟も上流社會に交際せんとする人々は、本書を一讀せざるべからず。本書挿入寫真二十六種の碑本并肉筆附は、不折先生の秘藏にて、或は千百金を値し、或は金錢にて得難き天下一品の墨寶あり。

というように、「苟も上流社會に交際せんとする人々」という記述は、「書」に対する当時の社会的認知度や階層的な位置づけを如実に物語っており、また、特に『六朝書道論』の第三版発行が、所謂マーケティング、即ち、出版市場の流通価値、価格の価値においても、且つ又は、文化的生産価値においても相応の位置を占めていたことがわかる。まさに、上流階級や知識人階級の所有欲をそそり、「書に志ある者」の野心と購買意欲を巧みに刺激しているのである。

ちなみに、第三版の奥付は、

大正三年一月三十日印刷

大正三年二月四日發行

大正三年六月三日増訂三版

とあり、第二版が大正三年三月には在庫が尽き、第三版発行のための増訂作業には三ヶ月という時間を費やしたことがわかる。価格は「特價金一圓三十五錢」と変わらず。第三版発行までの二松堂書店の収益や翻訳者の原稿料または印税収入には一定度のものがあつたであろう（注十）。

三 前田圓が『六朝書道論』に寄せた識語と眉批

前田圓の『六朝書道論』識語は、所謂『康熙字典』体ではなく、異体字を多用した「六朝」風の墨書で、その凶版は卷頭に配されている。以下、前田圓の識語を翻字しておく。

余毎歲夏時、避都門炎塵、嘯傲于壑窈窕之境。興到則弄筆作奇書、寫奇畫、墨痕淋漓。興盡而後偶有客。問曰、六朝書者、以斬鐵斬釘爲筆畫、何其奇也。余荅曰、六朝三百五十年間、名家前後角出、有萬馬齊鳴蹄、縱橫馳騁之。概然晉宋則禁碑、周齊則短祚。到魏亨國稍永藝業。亦興太和之後、刻碑尤盛。或以古雅着、或以奇逸勝、或瘦勁或峻宕、要動筆雄強、姿態森嚴而寓變化於齊整中、藏奇崛於平正裡、皆極精彩。凡書到魏碑可謂觀止矣。今子以斬鐵斬釘視六朝書、嗚呼淺也哉。客唯唯而去。余客遊中爲此問荅已。不知幾回也。頃日、不折靈山二君、六朝書道論譯成、徵余一言。因披閱之該博之識、雄麗之筆、天機爛漫、論六朝之書至矣、盡矣。後來有客問六朝書者、余將舉此書而荅焉。然此書一出、紙價貴於洛陽人。皆輒解六朝書、可無復發問。如昔日者歟。是爲序。大正三年、歲甲寅春王正月、識于超奇堂。默鳳道人田圓。

その内容からは、「六朝」の「書」に対する並々ならぬ傾倒ぶりが窺えよう。前田圓の眉批について、以下『六朝書道論』の篇名にしたがって一覽表

にしてみよう(表一)。眉批は、中村不折と井土靈山の手になるものがほとんどだが、例言に見たように、それらを「悉く通覽」した上で加えた眉批であることは、その傾向が前田の興味を知る上で重要な鍵となることは確かである。また、例言には「不折曰、…」で始まる以外のものは井土靈山の加えた眉批であることも明示されており、そのほとんどは語釈、語句説明である。尚、初版と第三版の数値は、それぞれの版にしたがって書き入れたが、三版では削られているものもある。

以下に、前田圓の眉批を列挙してみることにする。尚、各眉批に記した頁数は、『六朝書道論』初版本の頁数である。

- ① 黙鳳曰く論じ得て妙。原書第一 九頁
- ② 黙鳳曰く此論頗る其當を得たる者也。尊碑第二 一二頁
- ③ 黙鳳曰く冬心は變を知る者板橋は變を知らざる者也。尊碑第二 一四頁
- ④ 黙鳳曰く完白篆隸佳と雖ども市氣あり、況んや此を祖とする者をや俗氣紛紛見るに足らず。尊碑第二 一五頁
- ⑤ 黙鳳曰く論斷絶妙。尊碑第二 一五頁
- ⑥ 黙鳳曰く知言。購碑第三 一六頁
- ⑦ 黙鳳曰く亦知言と謂ふべし。購碑第三 一六頁
- ⑧ 黙鳳曰く是れ初學の法、斯くの如くする數年、運筆自在なるに至りて、即ち一年數十碑を臨して可也、是れ實習の法也。購碑第三 一七頁
- ⑨ 黙鳳曰く南北朝碑隸楷行草各體備はれり然れども古籀篆文に至りては未だ其佳なる者を見ず。學者此に注意して可也。購碑第三 二〇頁
- ⑩ 黙鳳曰く變化を説く甚だ妙。體變第四 三八頁

⑪ 黙鳳曰く鄧石如を以て孟子大鑑禪師に比するは大過鄧篆巧なりと雖ども李篆に劣る數等、故に鄧篆は入り易く、李篆は入り難し。説分第六 六三―六四頁

⑫ 黙鳳曰く鄧篆は猶我が菱湖の楷の如く初學之を學ぶは可也、之を以て祖とすべからず、更に進んで李篆石鼓を學び然る後商周鐘鼎文を臨寫して始めて其の妙を得ん。説分第六 六五頁

⑬ 黙鳳曰く靈廟鞠彦雲は古樸と稱するを得ず、宜しく峻拔と謂ふべし。備魏第十 九〇頁

⑭ 黙鳳曰く、知言 取隋第十一 九四頁

⑮ 黙鳳曰く、靈廟碑陰及び石門銘を神品と爲せるは當を得ず、靈廟碑陰を高品と爲し石門銘を逸品と爲すを穩當とす、石門銘は姿態飄逸行筆自在なりと雖ども、風神乏しく書品卑く神品と爲すの品格なし、靈廟碑陰は稍之れに勝る所あるも書品高からず、予は此二碑に換ゆるに瘞鶴銘と鄭文公論經書詩を以てせんとす。碑品第十七 一二五―一二六頁

⑯ 又曰く鄭道忠墓誌銘を妙品中に加ふべし。碑品第十七 一二六頁

⑰ 又曰く始平公造像を能品上と爲し、馬鳴寺碑を能品上と爲せるは當を得ず、二碑とも宜しく精品中に入るべし。碑品第十七 一二六頁

以上の十七項目である。

表一からも明らかであるが、前田圓の眉批は「原書第一」から「説分第六」あたりに集中しており、これは眉批総数ともほぼ比例する。中村不折等の校正原稿に手直しを加えたとは言え、敢て眉批を追加したことに意義を見出せよう。即ち、表中、初版と第三版で眉批の数に増加が見られるものはすべて中村不折による加筆であり、前田圓は第二版、三版以降の出版

には関わっていない。

「書」の理論書として、または「六朝書」の入門書としてのそれに対しては、中村不折との方向性の違いが浮き彫りになっていったであろうことが推察できる。新出土の文字資料を盛んに対照研究の材料として用いる「画家」中村と、西周金文、秦漢篆隸を標準にした金石、文字学を中軸に置く前田の「漢学」精神との距離であり、①、②、⑦、⑨、⑩などの眉批にはそれが如実に現れていると見ることができまいか（注十二）。明治二十一年（一八八八）の「鳳文館」倒産から三年後、日下部鳴鶴、中林梧竹等と共に「書學會」を興したのが明治二十四年（二八九一）である。その後、中村らと「健筆會」を興すのが明治四十一年（一九〇八）のことである。この間の前田圓は、企業家としての失敗と「書家」への転身に苦しんだ時代でもあった（注十二）。

四 前田圓の『東亜新字』

さて、前述のように康有為の『廣藝舟雙楫』（中村不折邦訳『六朝書道論』）における前田圓の「六朝」書に対する認識は確認した。ここで、『東亜新字』（明治三十七年・一九〇四・博文館）の内容を見ておきたい。この書の発行は、もちろん書誌「鳳文館」倒産後のことであり、大正三年（一九一四）、請われて『六朝書道論』に眉批を加える十年前のことである。前掲の大橋新太郎「博文館」から発行されている。

表一 『六朝書道論』眉批評初版・第三版比較表

篇名	眉批評総数		前田眉批	
	初版	三版	初版	第三
原書第一	10 則	10 則	1 則	1 則
尊碑第二	23 則	24 則	4 則	4 則
購碑第三	16 則	17 則	4 則	4 則
體篇第四	21 則	22 則	1 則	1 則
分篇第五	3 則	4 則		
説分第六	10 則	10 則	2 則	2 則
本漢第七	8 則	8 則		
傳衛第八	5 則	5 則		
寶南第九	1 則	1 則		
備魏第十	2 則	3 則	1 則	1 則
取隋第十一	1 則	1 則	1 則	1 則
卑唐第十二	1 則	1 則		
體系第十三	7 則	7 則		
導源第十四	5 則	5 則		
十家第十五				
十六宗第十六				

篇名	眉批総数		前田眉批	
	初版	三版	初版	第三
碑品第十七	3 則	4 則	3 則	3 則
碑評第十八	1 則	1 則		
餘論第十九	7 則	7 則		
執筆第二十	10 則	10 則		
綴法第二十一	4 則	5 則		
學叙第二十二	2 則	5 則		
述學第二十三	1 則	1 則		
榜書第二十四	1 則	2 則		
行書第二十五	8 則	8 則		
千祿第二十六	4 則	4 則		
論書絶句第二十七				

前田圓がこの書を著した目的を探るのは、漢学復興を目指した出版活動と康有為『廣藝舟雙楫』を邦訳した『六朝書道論』に対していかなる興味と関心、及び影響を受けていたかを見るためである。尚、本書の序文は前田圓の講演をそのまま活字に起こしたものでらしく、原文にはルビが付されているが、ここでは省略した。

前田圓は冒頭で次のように謂う。

諸君御詳知ノ如ク歐洲ノ文物ガ東漸シテ以来。追々東亜ノ學事ガ多端ニナリマシテ。我日本國デハ小學校デスラ七八科。中學校ニ入ルト

十二三科ト云フ多キ科目デ有ツテ實ニ學事ニ忙ハシク。其デ漢字ヲ廢シテ羅馬字ニスルトカ。假名書キニスルトカ。種々ノ議論ガ生ジマシタガ。支那朝鮮モ漸次右ノ如クナルト想ヒマス。文字ヲ簡易ニシテ文學ノ進運ヲ裨補スルト云フハ。極メテ美譽デ有ル。併シ清韓ハ勿論我日本デモ千數百年以來漢字ヲ用ヒ各種ノ典籍ハ殆ンド皆漢字デ滿タサレテアル。又片假名ハ楷書ノ一片ヲ取り。平假名ハ草書ヲ省畧シタモノデ。即チ漢字ハ昔時ヨリ我日本デハ日本ノ國字トナリ朝鮮モマタ朝鮮ノ國字トナリ。日清韓ハ同文ノ國デ有ル。故ニ余ハ東亜文字ト題シテ話ヲ致スノデ有リマス。

と、「東亜」の解釈を「日清韓」の三国に限定してその同文である認識を示している。また、

其レ之余ノ考案デハ從來ノ東亜文字ヲ省略シテ文字ヲ作り易クスルガ簡便ニシテ且ツ行ヒ易ヒト思ヒマス。東亜ノ字數ハ多シト云フモ。普通實用ノ文字ハ三千内外ニテ。ムツカシキ漢詩漢文ヲ作ルモ五千字以上ノ文字ヲ遣フ人ハ古來餘リ無イ様ニ思ヒマス。右等字數ノ撰擇等ハ既ニ外々ニテ企テ有ル様デスカラ。余ハ文字ヲ省畫スルニ就テ卑見ヲ述ベ考案ヲ附シマス。

と、字画の省略によって書き易くすることが本旨であることに触れている。そして、その凡例では、次のような規範を示していく。

一 東亜文字ヲ省改スルノ目的ハ、畫ノ多キモノヲ省キテ作字ニ便ゼシムルト、其此ガ爲メ從來ノ文字ヲ解シ能ハザルナキヲ期スルニ在リ。故ニ畫ノ少ナキ文字ハ從來ノモノヲ存シ、畫ノ多キ文字ハ其ノ多キニ隨ヒ倍々削減スルモノトス、
一 少畫ノ文字ト雖モ作字ニ不便ナルモノハ其點畫等ヲ改作スルモノト

ス。又古人ノ省文中佳ナルモノハ之ヲ用フ。

一漢人偏旁ニ於テ多ク尙ト呂、臬ト參、參ト尔、竹ト艸、東ト束、麥ト麥トヲ混用シ。後人ヲシテ誤ラシムルモノ多シ。今ニ改作シ混用ナキヲ期ス。

実際に「新字」に用いられたのは、例えば、「古文」、「古篆」、「古隸」、「古隸省」と注記する以外には、「鄭義碑」、「始平公」、「司馬昇墓志」、「李文墓志」、「張尊師墓志」、「刁遵墓志」、「敬使君墓志」、「口授銘」、「賈思伯碑」、「元審造象」、「吳高黎墓志」、「王祐造象」、「龍門佛龕碑」、「根法師碑」、「爨寶子碑」等等、例を挙げればきりが無いが、『廣藝舟雙楫』（『六朝書道論』）に登場するさまざまな南北朝碑の文字である。『東亜新字』とは、漢字の源流に遡りつつ、その字義解釈と字形研究に精緻な態度を備えて、簡略化を目指す近代的日本の漢字を構築しようとしたものである。

小結

明治時代の漢字は、「書」の立場からは、皆がこぞって御家流を嫌い、目新しい「六朝」を崇拜していったかのように見える。画家中村不折は、「龍眠帖」に代表されるように、「書」の絵画化に一步を踏み出す足掛かりとして正岡子規などその後の文芸界にも影響をもたらしたのである。漢学復興論者の前田圓は、漢学的背景を堅持した正統的の文字研究を基盤として、所謂伝統派、正統派に大きな足跡を残した。しかし、「帖学」の衰微に端を発して「碑学」を提唱する場合、康有為等のように、中国人がそれを謂う場合と日本人がそれを謂う場合とは、大きな違いが存在することに注意せねばなるまい。

近代国家の「文字」論として見る場合、前田圓は「日中韓」の「同文」を論じて「東亜」と称したが、そこには三国の「漢字統一」を図ろうという意図がなかったとは言いが切れない。近代化、特に、明治維新の喧騒からしばし解き放たれ、しかし、時代は西洋化に向かつてどんどん突き進んで行く、謂わば、比較的安定的ではあっても非常に葛藤の多い時代にあつて、「六朝」以前の文字に着目してそれを推奨することは、日本の文化に大きな影響を与えてきた唐王朝以来の中国文化の影響から脱却することを意味し、また、完全に西洋化することへの抵抗とも言えるからである。意図してか否か、「書」を論じることでそれをカモフラージュすることができたのだとすれば、前田圓の転身は、実に見事に日本人のアイデンティティを具現化しようとした姿だったと言える。

康有為の『廣藝舟雙楫』、即ち、『六朝書道論』に眉批した前田圓は、前述眉批の①、⑤、⑥、⑦、⑩、⑭などのように、康有為説を全面的に支持する態度を見せている。この圧倒的支持を受けた康有為の言説は、いずれも、西洋文字より漢字造形の美を賞賛し、唐より六朝以前の文字を讃えた部分であることがそれを物語っている。

注

- (一)「中村不折與前田黙鳳―關於日本近代書道走向現代之社會背景反思―」では、明治時代の文人的環境と書画芸術の世界が内包する現代的問題について論じた。

- (二)『江戸文学』第十五号（一九九六年五月三十一日）、『江戸文学』第十六号（一九九六年十月三十日）所載。

(三) 安政四年(一八五七)に老中に昇進し、外国掛として「日米修好通商条約」の締結などに関与した。

(四) 『播州龍野藩儒家日記―幽蘭堂年譜―』の竹下喜久男氏解題によれば、俣野玉川(字 才介、諱 充美、号 玉川晚年楽翁、軒号 幽蘭堂、諡 文恭先生)は、父の労と紹介で、龍野藩儒家藤江熊陽に師事し、学派に固執しない道徳仁義の実践履行を学んだとされる。

(五) 海原亮氏は、その資料的価値について、一、藩士教育に関わる記事、二、藩内あるいは幕府の政治、他国の流行・風俗、日常の出来事、三、人物交流、の三点を挙げて、特に、大阪懐徳堂の中井竹山との交流関係を注視しておられる。

(六) 『播州龍野藩儒家日記―幽蘭堂年譜―』は、大谷女子大学資料館報告書に、一九八〇年から四回にわたって掲載されたもので、公刊にあたって補訂が加えられたものである。日記原本は、龍野市立歴史文化資料館に保管されている。

(七) 『中央美術』(中央美術社)第三十巻第一號(大正十六年一月一日)、第三十巻第二號(昭和二年二月一日)、第三十巻第三號(昭和二年三月一日)参照。

(八) 拙稿「康有為的中華文化史観」。

(九) 北京圖書館編(書目文獻出版社・一九九四)。

(十) 明治時代は印税が定着しておらず、松浦総三編集『原稿料の研究(松浦総三編集)』(日本ジャーナリスト専門学院出版部・一九七八)によれば、印税制度を初めて実行したのは森鷗外だという。「日本では、明治末期から、四百字詰原稿用紙一枚に対して、何円という支払われ方をするようになったことから、原稿料と呼ばれるようになった。…(中略)…この印税制度を初めてはつきり主張した森鷗外は、「それがいやなら本を出さん」というので、面く

らった春陽堂は、どのくらい出していいかわからず、二割五分支払った。外国ではそのくらい支払っているらしい。つづいて漱石には、三割一分支払った。」ということのようで、大正三年当時も、出版分野はともあれ、売れ筋の書籍についてはほぼ同様の収入があったと見られよう。この点は、二松堂の経営形態について更に深く調査する必要がある。

(十一) 注(一)に同じ。中村不折の「龍眠帖」に日本の時代的評価とフランスの評価、及び、創作の方法論において、「漢字の構成原理と仮名的構成原理」の一元化が行なわれたのではないかを推論した。

(十二) 注(二)に同じ。